様式３

令和３年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

幸町キャンパスに学生のつながりの場をつくるプロジェクト

～小さな有機農園からコミュニティづくりを考える～

代表者　　長　樂　成　美　（経済学部経済学科３年）

１．目的と概要

今年度の活動は、学生に馴染み深いキャンパスで有機野菜を育て、有機野菜を振る舞う食イベントの開催、居心地の良い環境づくりを通じて学内につながりの場をつくることを目的としていました。私たちの問題意識は２つあります。

①現在、政府が SDGs の政策の中で、2030 年に有機野菜を利用する人を 25%にすることを掲げていますが、若い人を中心に有機野菜に対する認識が低く、ギャップが生じています。また、一人暮らしをしている人が多い学生は健康的な食に対する認識が低い人が多いのが現状です。

②コロナ禍以前から都市化によって地域住民同士のつながりが弱まっていることが問題視されていました。新型コロナウイルス感染症が流行する現在、オンライン化が進んでおり、さらにつながりの場が減少しています。このことから、人とのつながりを取り戻したいと考えています。

このプロジェクト事業の取り組みは大きく２つに分かれており、１つ目が今年度から始めた居心地の良い環境づくり、２つ目が以前から行なっている有機野菜の栽培と魅力発信です。

２．実施期間（実施日）

令和３年４月１日から　令和４年３月３１日まで

３．成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業では、４つの内容を実施しました。

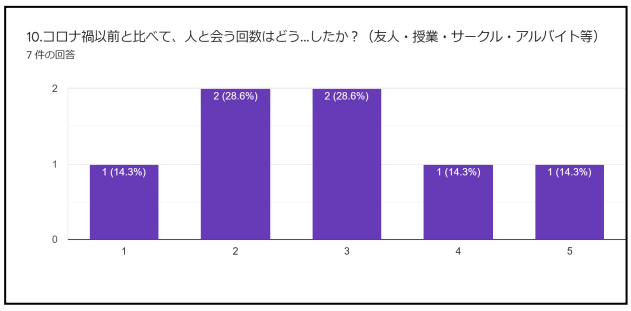
①居心地の良い環境づくり

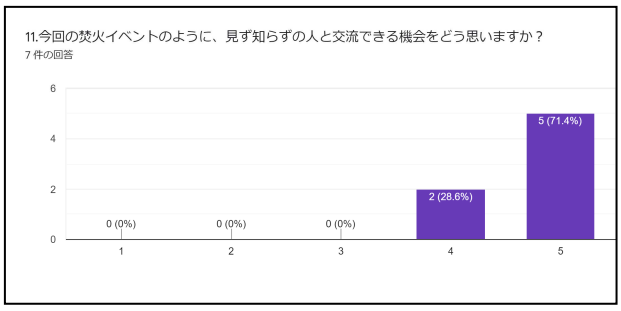
(1) 焚火イベント

イベントに向けた試験運用を 8 月と 10 月に 1 回ずつ実施しました。参加者は使用運用のためプロジェクトメンバーのみであり、8 月に 3 人、10 月 12 人でした。場所は有機野菜を育てているちょんまい農園内で行い、実際に火を囲んで会話することで、普段よりコミュニケーションが取りやすい空間になることが分かりました。しかし、アメニティ広場が雑草地帯であり、人が集うには難しいと感じたため、イベント開催に向けて農園内の草抜きを行いました。

11 月、12 月には焚火イベントを実施し、12 人の学生が参加してくれました。場所や内容は試験運用の時と同様ですが、ちょんまい農園で取れた有機野菜の提供、焚火に関するコミュニティについてのアンケートを実施しました。初めて会う参加者同士で交流が生まれ、火を囲むことで話しやすい環境を作り出し、会話を弾ませることができました。しかし夜のアメニティ広場周辺には学生が少なく、イベントの存在を知ってもらえないため、勧誘が難しかったです。

焚火イベント参加者に対して、11 月 18 日、12 月 23 日の計 2 回アンケートを実施し、7 件の回答を得ました。アンケートから 2 つのことが分かりました。1 点目は、コロナ禍以前と比較して人と会う機会が減少したこと、2 点目は見知らぬ人と交流できる機会を必要と考えている人が多いことです。課題点として、アンケートを焚火イベント参加者にしか実施していないので、結果に偏りがあったと考えています。焚火イベント参加者以外を対象としたアンケートを合わせて実施することで、「コロナ禍以前と比較して人と会う機会、見知らぬ人と関わる機会の必要性」について、現状に迫れたのではないかと感じています。



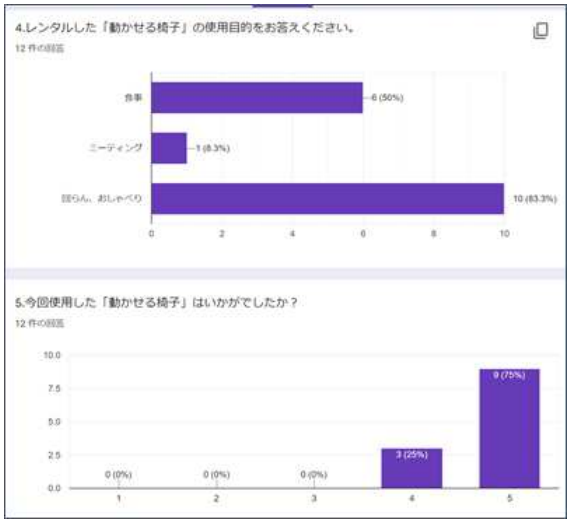


(2) 椅子イベント

11 月と 12 月には、可動式の椅子を貸し出し、学生に自由に使ってもらうというイベントを開催しました。これは学生がキャンパスを自由に使い、学生同士がつながるきっかけをつくることを目的として実施しました。実際に参加してくれた 12 名の学生は、友人との昼食や会話、オンライン授業に椅子を使用してくれました。一方で、学内での椅子の貸し出しにあまり馴染みがないためか、利用に抵抗感を持つ学生が一定数いることも分かりました。そのため、このイベントは継続的に実施していくことが大切だと感じています。

また、利用者に実施した椅子イベントに関するアンケートでは、使用目的として食事やミーティング、団らんが多いことが分かりました。この椅子イベントは各個人のニーズに合わせて好きな場所で使ってもらえますが、一方で、手荷物が多く椅子の持ち運びがしづらいことが課題として挙げられます。

椅子イベントの開催、利用者へのアンケートを通じて、本事業が学生同士のつながりの場を創出する可能性があることが分かりました。



居心地の良い環境づくり（焚火・椅子イベント）のアンケートを通して

課題点が 2 つ挙げられました。1 点目は、回答者の母数が少ないことです。アンケート回答該当者が参加者に限られたことで、アンケート結果の偏りに繋がりました。また、新型コロナウイルス感染症の影響により、参加者を大勢募ることが出来ませんでした。2 点目は、イベントを実施する際の管理・申請の難しさです。

良かった点として、アンケートを通じて 2 つのイベントに対して、興味や好感を抱いてくれている人を把握できたことが挙げられます。また、人との交流やつながりの場を求めている人が多いことを知ることが出来ました。

②有機野菜の栽培と魅力発信

(1)有機野菜の栽培（農園管理）

丸亀市で有機農園を運営しているよしむら農園の吉村さんにご指導いただきながら、アメニティ広場の一角を農園として、有機野菜を栽培しました。あまり活用されていなかった場所を居心地の良い、過ごしやすい場所とするため、草抜き等農園管理を行いました。

(2)魅力発信

有機野菜を育てる過程での気づきや学びを、Instagram を中心とする SNS で発信しました。学内外を問わず大勢の方に見て頂き、Instagram のフォロワーが約 250 名増加しました。また、大学生を対象に有機野菜に関するアンケートも実施し、134 名の方に答えて頂きました。アンケートを通して、学生にとって有機野菜は高価であることや知らない人が多いことなど、有機野菜の課題を実感しました。

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を通して、コロナ禍で失われていた、「つながる」場所や機会を本学の学生に提供できたと考えています。大学内で偶然、出会った人同士が火を囲んで話すという非日常的な機会は他にはなく、普段通りの学生生活を送っていれば交流しえなかった学生同士をつなげることができたのは大きな成果だと実感しています。また、椅子イベントでは、大学内で自由に可動式椅子を利用してもらい、屋外でのミーティングや昼食に使ってもらうことができました。既存のベンチやテーブルに学生が集中する昼食の時間に、学生がキャンパスを広く活用できるようになったことも大きな成果ではないかと感じています。

さらに、これらの活動風景を頻繁に SNS で投稿したことにより、学内外の方に私たちの活動を知ってもらうことができました。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

このプロジェクトを通じて、3 つの学びを得ました。1 つ目は新しいことに挑戦する大切さです。学内で焚火や椅子の貸し出しイベントを開催するという前例があまりない挑戦でしたが、大学との連携を常にとりながら、メンバーと協力し、イベントを開催することができました。次に、求められていることを把握し対応することです。学生に対してアンケートを実施し、学生はつながりや交流の場を求めていると分かりました。その調査結果に基づき、焚火イベントを展開できたのではないかと考えています。最後に、私たち自身も本事業を通じて様々な学生とつながりを持てたことです。本事業に取り組まなければ、交流しえなかった学生や教職員の方々とつながることができたことは、大きな成果でした。

６．反省点・今後の展望（計画）・感想等

今年度の課題として、コロナ禍ということもあり、焚火イベントや椅子イベントの開催判断が難しかったことです。感染状況を見ながらの判断であったため、開催の決定が急となり、十分な広報ができなかったことが反省として挙げられます。十分な広報ができなかったために、アンケート回答数が想定していたよりも少なくなってしまいました。夜に開催したイベントもあり、学内にいる学生が少ないため、集客が難しいという課題もありました。有機農園を活用したつながりの場づくりとして申請時には、自分たちが育てた有機野菜を学生に提供するマルシェや試食会の開催を検討していましたが、コロナ禍のため開催できませんでした。代替案として、ちょんまい農園で有機野菜栽培体験イベントを開催し、農作業を通じて参加者同士をつなげる場があってもよかったのではないか、他プロジェクトと協力すればよかったのではないかと、今年度の活動を通じて感じています。

７．実施メンバー

代表者　長樂　成美（経済学部３年）

構成員　早見　知紗（経済学部３年）　青野　桃子（経済学部３年）
宮脇　令佳（経済学部３年）　井内　美佑（経済学部３年）
江口　舞香（経済学部３年）　越智　菜月（経済学部３年）
北口　朋希（経済学部３年）　鈴木　拓海（経済学部３年）
真鍋　佑月（経済学部３年）　三野　奈津希（経済学部３年）
山縣　香納絵（経済学部３年）

８．執行経費内訳書

配　分　予　算　額		２１８，３４８円		
執行経費（品目等）	数量	単価(円)	金額(円)	備　考
簡易消火具　火消しスプレー外	１		３７，５９０	
ディレクターチェア	２	２，５００	６６，０００	
マキ　焚きつけ用　１束　外	１		４，９２７	
小型物置	１		１０６，９２０	
予算引き上げ			２，９１１	
合　　計			２１８，３４８	